

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 亘

本論文は、政治哲学者として著名なジャック・ランシエール（1940年-）の美学・芸術思想を、同時代の、ならびに先行する哲学者・思想家・芸術家に対するランシエールの批判・再解釈に焦点を当てることによって、総括的に解明するものである。本論文をとおして著者は、ランシエールが、同時代のいわゆるフランス現代思想系の哲学者に広く認められる形而上学的傾向、すなわち超越・無限・外部・他者といった概念を重視し、「美」ではなく「崇高」を特権視する傾向を批判しつつ、むしろ現実的で具体的なもの・卑俗なものに依拠し、「崇高」に代わって「美」の持つ意義に改めて注目し、政治（学）につうじる独自の美学理論を展開していることを明らかにする。

本論文は7章からなる。著者はまず第1章において、ランシエールの芸術史観を取り上げ、18世紀後半から現代にいたるまでの芸術認識を規定する「芸術の美的体制」を、とりわけ純粹主義的モダニズム、および折衷主義的ポストモダニズムとの対比において特徴づける。続く第2章では、ランシエールがシラーの「美的教育書簡」（これはランシエールによって「芸術の美的体制」を範例的に示す著作とされる）の解釈をとおして、美と社会変革をいかに関係づけているのか、この点を明らかにする。著者によれば、美しいものはその「美的宙吊り」によって既存の諸対立を一挙に相対化し、「感性的なもののパルタージュ」（すなわち、美的なものに参与しうる人と参与しえない人との分割、ないし共同体からの後者の排除）を再編成する、という主張こそ、ランシエールの哲学の基本に位置する。

ランシエールと同時代の理論家との対決を扱う続く2つの章において著者は、リオターの「崇高」論が最終的に超越的・否定神学的傾向を免れないこと、また、ブルデューの社会学的趣味論が支配階級と被支配階級の固定化につながることを剔抉した点に、ランシエールの独自性を見て取る（第3、4章）。

続く3つの章は、ランシエールによるマラルメ、フローベール論を扱う。著者は、ランシエールがマラルメをダンサーやデザイナーと同列に扱う論述のうちに、あるいは、フローベールのテキストから複数の相対立する政治性を取り出し、それらをあえて衝突させる点に、「感性的なもののパルタージュ」の再編成という「芸術の美的体制」に固有の政治の具体的実践を読み取る。

著者がランシエールを同時代の思想家と比較対照する際、そこには一部論点の単純化も見出されるとはいえ、ランシエールの理論それ自体が行為遂行的（パフォーマティヴ）に「感性的なもののパルタージュ」の再編成を目指している、という著者の主張はランシエールの美学・芸術思想を彼の政治思想とのかかわりにおいて首尾一貫した視点から捉え返すことを可能にし、今後のランシエール研究に大きく資するものと思われる。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。